The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イタリア未来派の建築 : ヴィルジリオ・マルキを中心に
Author(s)	近藤, 健史
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 72-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53321
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イタリア未来派の建築
── ヴィルジリオ・マルキを中心に ──

近藤健史／大阪芸術大学

近年，再検討の機運が高まる未来派は，その運動の創始者F. T. マリネッティが1909年に「未来派創立宣言」を発表するところから始まる国際的な芸術運動である。未来派芸術運動は絵画，彫刻，文学，タイポグラフィー，音楽，演劇，写真，映画，ファッション，建築，インテリアといった近代芸術全般にわたり，その活動においては発表された複数の宣言が大きな役割を果たした。

本発表は未来派芸術運動の中で，特に近代建築運動としての未来派と宣言について，第一次世界大戦後に展開した後期未来派の代表的建築家であるヴィルジリオ・マルキを中心に考察し，彼の建築に関する宣言と建築家としての活動の一端を明らかにするものである。

発表では，まず，マルキの経歴と作品の紹介を行った。彼が未来派的な建築ドローイングの制作を始めたのは1919年以降であり，同年から1920年代にかけて多くの建築的作品が制作された。1919年には未来派の機関紙である『ローマ・フトゥリスタ』紙や『ノイ』誌などに作品を掲載し，未来派の建築家として活動を始めた。同時期にマルキが発表した一連のドローイングは，彼が1924年に出版した著書『未来派建築』に再録された。

同書に再録された作品である「未来派都市」や「都市の光景」においては，B. タウトのような表現主義的とも見て取れる流動的なアーチが各所で用いられている。これらのドローイングではホームに溢れて列車を待つ，または忙しげに街路を行き交う人々，縦横に立体的に交差する線路や何本もの列車が表現されており，そこからは躍動感溢れる都市の喧噪が感じられる。また，これらは夜の光景とも捉えられ，電気など新しいエネルギーの躍動も感じられる。

「超都市」のドローイングでは，連続して一体となっている高層建築物の屋上が飛行機の滑走路となっており，鉄道や街路が層を成して都市を貫通している。交通・輸送手段としての航空機の発展は1930年代以降であり，この計画はそれ以前に航空機を含む本格的な都市交通基盤整備の可能性を探った作品として興味深い。これらの作品は，一種の多層都市的計画といえる。しかしマルキの作品は，例えばA. サンテリアら前期未来派の建築的ドローイングにみる機械的なものが溢れる都市のイメージとは少し異なるように感じられる。

次に，マルキが1920年2月29日『ローマ・フトゥリスタ』紙，72号で発表した「未来派建築宣言／ダイナミック，精神状態，ドラマティック」をイタリア語原文から試訳し，考察を試みた。

宣言文頭において，当時の建築の状況を「非難されるべき形態の混成，伝統的基準と俗悪な思索を再びぞんざいに組み合わせた結果」と特徴付け，続いて古典的様式に反対する態度が表明される。マルキは宣言の中で「生き生きとした要求と意志を見つめた未来派建築の最初の宣言に戻ろう」と主張し，サンテリアの「未来派建築宣言」に敬意を表している。

マルキは「安定した垂直と水平という古い構成から抜けださなければならず，革新的な曲面，力強い線，単純な，かつ複雑なものの抽象的運動の複合として合成された，全体の

ダイナミックな衝撃という造形的運動を見つけださなければならない」と主張する。サンテリアも斜線や曲線の利用を主張しており，両宣言に共通した主張である。しかし，マルキは前掲書『未来派建築』の中でサンテリアは斜線や曲線の可能性を表現しきれていないと発言している。実際にサンテリアのドローイングでは，斜線や曲線の利用は限られているように感じられる。一方，マルキはアーチや流動的形態を多用している。これは，マルキにより彼の宣言の主張が表現されたもの，コンクリートを用いた建築デザインの可能性が模索されたものであると考えられる。

マルキは建築装飾を否定してはおらず，これは未来派の建築に関する主張としては特異である。彼の宣言全般にみられる，都市からインスピレーションを感じ取り，建築の形態を探求する姿勢は，速度や電気を鉄道駅や発電所として，具体的に象徴させて表現したサンテリアのそれとは明らかに異なる。この宣言からは未来派造形理念の本質に近い，マルキの建築に対する思想が感じられる。

マルキは宣言を発表した1920年，建築デザイン教員の資格を取得した。その後1921年A. G. ブラガーリアがローマ，アヴィニョネージ通りに開設した「ブラガーリア芸術の家」の内装を実現させた。これは旧ティットーニ邸基礎部にあった古代ローマ，セウェルス帝の浴場遺跡を改修したものである。マルキはブラガーリアと相談の上，この改修のコンセプトを「古代の遺跡に未来派的メーク・アップを施す」と決定し，デザインを行ったとされる。「芸術の家」内に設けられた小劇場「独立劇場」は，遺構を利用したとみられるヴォールト状の天井を持ち，2階部分の手すりはバロック様式を想起させる曲線が用いられている。「バール」においても曲線や曲面が多用され，未来派的というより，むしろ表現主義的に感じられる。

最後に，後期未来派の建築活動に関わった芸術家としてE. プランポリーニ，A. マッツオーニ，F. デペーロ，G. フィオリーニを取り上げ，それぞれの略歴・建築的作品と共に，彼らの未来派的側面の紹介を行った。

マルキが未来派の建築家として活発に活動したのは主に1919年から1920年代であり，その間に制作された多くの建築的ドローイングにおいて，多層都市的計画が確認できる。また，彼の宣言「未来派建築宣言／ダイナミック，精神状態，ドラマティック」における主張を表現する，アーチなどを用いたドローイングも確認できる。宣言においてはサンテリアの後継者的役割を果たしながらも，マルキ独自の理論である「ダイナミズムの安定性」を求め，その建築を模索した。しかし「ブラガーリア芸術の家」においては「未来派的メーク・アップ」として改修を行うに留まった。未来派の基本的姿勢や主張からすると，古代ローマの浴場遺跡はまさに破壊されるべき対象である。マルキは現実の建築計画と宣言や思想の表現としてのドローイングとの間で苦悩した建築家でもあったと考えられる。

R. バンハムは著書『第一機械時代の理論とデザイン』において，サンテリアの作品や建築宣言に関して詳細に分析し高く評価する一方で，マルキのそれを「愚行」と断じるなど，適切な評価をしているとはいえない。しかし，マルキが都市からインスピレーションを感じ取り，建築として表現する姿勢は，「未来派創立宣言」をはじめとする絵画や彫刻分野における未来派造形理念の本質に近いものである。彼は，建築に対する思想とその表現としてのドローイングの間に直接の関係が見られる未来派の建築家として評価することが出来るだろう。